

近世琉球における茶文化の重層性

岡本弘道

Multilayered Structure of Tea Culture in Early-modern Ryukyu

OKAMOTO Hiromichi

近世期の琉球は、日本と中国双方の茶文化の影響を受けて、独特の茶飲嗜好に基づく茶文化を形成した。近世期以前より琉球には日本の茶の湯文化が既に流入していたが、近世期になると琉球独特の国際的条件も相俟って、日本と中国の茶文化がより積極的に受容されるようになった。日本・中国双方から大量の茶葉が輸入される一方で、国内での茶葉・茶器生産も確認され、琉球社会の内部で広範に消費される条件を提供した。このように日本茶・中国茶を並行して飲用するという茶飲嗜好は、近代以降にみられる琉球＝沖縄における独特の茶文化の基盤をなしたと考えられる。

キーワード：茶の湯文化、煎茶、茶器、中国茶、日本茶

0. 問題設定

現在の沖縄県と鹿児島県の南西部島嶼域から形成される、いわゆる「琉球弧」は、先史時代から九州以北の日本列島と深い交流を持ちつつも、基本的には独自の文化圏を形成する「異域」であった。そのため、茶文化の面から見ても、九州以北の日本列島とは相当の関連性を持ちつつ、それとは異なる受容・発展形態が見られる。現在沖縄で一般に飲まれているお茶として「さんぴん茶」が知られているが、これはもともと中国で「香片」（現代中国語で xiāng piàn）と呼ばれるジャスミン茶が沖縄に定着したものであり、前近代からの中国との外交・経済関係に由来するものである。また、一方では日本各地に点在する振茶の系統と思われる「ブクブク茶」も知られており、近年沖縄独自の茶文化として注目されつつある。このような認識の下、大槻暢子氏・宮嶋純子氏と共に2008年11月、2009年7・8月に沖縄本島及び久米島において現地調査を行った。その成果のうち、近現代の沖縄で消費された茶葉については宮嶋論文が、また「ブクブク茶」に関しては大槻論文が扱っている。本稿においてはそれらの前提となる前近代、とりわけ近世期の琉球における茶文化を検討して、周縁地域としての琉球における茶文化の重層性・多様性を確認したい。

琉球の茶文化史についてはまだ不明な点も少なくないが、最近では相当数の研究がなされるようにな

り、琉球の茶文化に対する注目は高まりつつある。その論点も多岐にわたるのであるが、本稿ではまず琉球における茶文化の受容過程を確認し、その中で日本に由来する茶の湯文化がどのように影響しているのか、そして近代以降の琉球＝沖縄の茶文化に連動する問題として、日本茶と中国茶の飲用の併存という、独特の嗜好性が生まれた過程を確認する。

1. 近世以前の琉球における茶文化

a. 考古学的成果からみた近世期以前の琉球の茶文化

琉球弧の考古学的画期としてのグスク時代は12世紀頃に始まるが、実際の琉球弧内の考古遺跡において茶文化に関連する茶道具の遺物が発掘されるのは、一般に14世紀以降とされる。これらの遺跡からは特に天目茶碗のように日本の茶の湯文化と密接に関わる陶磁も多く出土しており、その意味ではグスク時代の琉球弧は既に茶文化の影響を受けていたということも可能である。しかしながら、これらの陶磁が果たして琉球弧内で茶器として用いられていたか、また琉球弧内で実際に飲茶が行われていたのかについては、これらの出土遺物のみから判断することはできない。単に転売用の交易品として持ち込まれた、あるいは飲茶とは無関係の用途で用いられた可能性があるからである。新垣力氏はこれらの可能性に留意した上で、出土した茶道具をその用途によって以下のように区分し、それぞれの出土状況の組み合わせに着目して茶文化の伝来と普及を考察している。

- ①喫茶及び点前に関する茶道具：茶を点てて飲む際に用いる茶道具。天目茶碗と総称される鼈口の茶碗、抹茶を入れる茶入、碾茶を貯蔵する茶壺、釜に補う水や茶碗をすすぐ水を入れる水指、すすいだ水を捨てる建水が相当する。
- ②炭手前に関する茶道具：炭に火を入れて湯を沸かす際に必要な風炉と茶釜、炭の臭いを消すために用いる香合、聞香に使用する聞香炉が相当する。特に風炉と茶釜は、当該期に茶が飲まれていたと想定できる資料の一つである。
- ③懐石料理に関する茶道具：当該期（14世紀～17世紀頃）の本土では懐石料理の調理具に備前焼播鉢が使用された例がある。
- ④その他の茶道具：その他として挙げた茶道具には、茶の湯を楽しむ環境を整備するためのものと、茶事の準備段階に必要な物がある。前者は暖房具・植木鉢・硯、後者は茶臼が相当する。¹⁾

以上のような遺物の出土が確認できる、いわゆる茶道具出土遺跡は少なくとも63遺跡を数え、また上記四種の全てが出揃うのは合計10遺跡であるという。この10遺跡には今帰仁城跡・浦添城跡・首里城跡などの大規模グスクと共に、天界寺・円覚寺などの寺院、また湧田古窯跡のような官窯的な性格を持つ生産遺跡が含まれている²⁾。無論、茶道具については「見立て」といった形で異なる用途の器具を用いることも少なくなく、またその出土が直ちに茶道具としての使用や茶飲の習慣の存在を意味するわけでは

1) 新垣力「沖縄における茶の湯の普及とその影響——14世紀～17世紀頃の考古資料からの検討——」『南島考古』第26号、2007年。

2) 新垣 前掲論文、214頁。

ないことに留意する必要があるものの、少なくとも15世紀後半から16世紀にかけて、主要グスクや大寺院等で生活する支配者層・上流階層の間では茶文化が普及していた状況を想定しうる。

b. 文献史料からみた近世以前の琉球の茶文化

知られている限り、文献資料において最も早く琉球の茶の湯文化について記述されたものは、1534年に琉球に渡来した冊封使の陳侃による『使琉球録』である。以下の記述については既に多くの先行研究で言及されているものである。

「(前略)……ただ、そこ（引用者註：天界寺・円覚寺）の僧はすべて鄙俗であって、共に語るべくもなく、また、あえて目通りしようもしない。しかし、茶道の心得がある。台子に風炉を設け、湯をわかし、沸騰する頃あい、茶碗に抹茶を一匙もり、そこへ湯をそそぎ、茶筥でたててから、ややあって客にすすめる。その味は、はなはだ清らかであった。」³⁾

ここでは天界寺・円覚寺における茶の湯について述べられているが、ここで茶を点てているのが恐らくは日本から渡来したと思われる仏僧であり、冊封使一行との交流を避けている様子が窺えることから、ここで記されている茶の文化は恐らく日本より伝来した抹茶による茶の湯文化と考えてよいであろう。琉球王国で始めて御茶道職に就任したのは『喜安日記』等で知られる喜安蕃元であり、1600年のこととされる⁴⁾。喜安蕃元は堺の出身であり、また16世紀を中心に堺と琉球とは交易上緊密な関係を持っていたことを考えると、16世紀には堺から相当程度の茶の湯文化の流入が起きていたとすることは、前節でみた考古学的知見に照らし合わせても自然な想定であろう。ただしこれら茶の湯文化の受容はあくまで支配者層・上流階層が中心であったようであり、その影響力も限定的なものであったと考えられる。

2. 近世琉球における琉球の茶文化

a. 近世期の琉球における茶の湯文化

琉球王国時代の茶文化については、従来の研究を見ると主に茶の湯文化との関連を中心に論じられてきた⁵⁾。これはもちろん、文献資料を中心とした研究においては、ハイカルチャーである茶の湯文化の方がより扱いやすいという事情がある。ただし、ここでは研究史の深部に踏み込むのは避け、最低限の確

3) 『使琉球録』使事紀略。日本語訳は原田禹雄訳注『陳侃 使琉球録』（榕樹書林、1995年）、50-51頁による。

4) ただし、伊波普猷「ブクブク——琉球における一種の茶道——」（『伊波普猷全集』第10巻、平凡社、1976年）は、それ以前に茶道に関連した職の存在が確認できるとする。

5) 喜舎場一隆「琉球における茶道」『九州文化史研究所紀要』第35号、1990年。平敷令治「琉球国の茶人と御茶道（一）～（四）」『孤峰——江戸千家の茶道』第23巻第3～6号、2001年。ヘンネマン、H. S. 「琉球王朝の茶の湯」『茶道雑誌』第63巻第2号、1999年。同「琉球王朝の茶の湯——受容史における喜安の実像と利休流伝来の一考察——」沖縄県立芸術大学大学院芸術文化科学研究科（編）『沖縄から芸術を考える』榕樹書林、1998年。真栄田義見「琉球茶道史」『淡交』No.469、1985年。

認に留めることとしたい。

後述するように1627年には鹿児島から茶樹が移入されて、漢那村にて琉球における茶葉の生産が始まったとされ、17世紀後半には御茶屋御殿が首里に造営されるなど、茶の湯文化が王国の中で受容・振興される様子をうかがうことができる。また、向象賢（羽地朝秀）の「羽地仕置」には、士族が嗜むべき諸芸として計12種が挙げられている。大まかに区分すれば、「学文」「算勘」「筆法」「筆道」といった役人としての職務と教養に直結する技能、「医道」「庖丁」「容職方」「馬乗方」のような専門に特化した技能、「謡」「唐楽」「茶道」「立花」のような接待・社交の場における技能であり、これらの内の一つでも嗜まないものがあれば、家柄如何にかかわらず任用しないと明言されている。その一つとして茶道が挙げられていることは注目すべきであろう。茶の湯文化がとりわけ薩摩や日本との関係において必要な教養として位置づけられていた様子がうかがえる。ただし逆に考えれば、「羽地仕置」が起草された時点では「茶道」はなおその習得が督励されなければならなかった状況であった、つまりそれほど士族一般に普及してはいなかったという見方も可能である。渡名喜明氏は、琉球の茶道の実践について次のように述べる。

これらの芸に対する素養が上薩・上江の際に不可欠とされたのは言うまでもないが、国内で公務として披露される実践の場は王城内の南殿であった。薩摩から琉球の外交・内政全般にわたる目付役として派遣され、3年単位で常駐する在番奉行を接待することを主目的に作られた建物である。創建は「天啓年間」（1621～1627）と記録される。招請の方法は純和風であり、茶道や立花、座敷飾りの作法がこの場で行われたと考えられる。招請は公務であった。そして、薩摩・江戸などにおける所作・振る舞いのための学習の場でもあった。在番奉行や付け役の士は、王府の役人にとって和風芸能の師匠であり、相談役を兼ねたことになる。当然茶の湯についての指導も受けたであろう。⁶⁾

高津孝氏は、茶道を介した薩琉交流に関する事例として、17世紀末に琉球王府の年頭使として鹿児島の琉球館に滞在中であった毛起龍（識名盛命、1651-1715）による薩摩の茶会の記録を紹介している。1700年の旧暦3月、薩摩藩士村田氏の催した茶の湯の会に招かれた時のものである。

参会者は、他に野本氏、伊地知氏、肥後氏の三名である。路地を入り、木立の並ぶ苔むした道を通り、春の名残の岩躑躅や萩、薄、石灯籠、手水鉢を過ぎて、にじり口から茶室に入ると、炉の周りの設えはきよらかに、調度も唐、大和の珍品が並んでいた。会席の後、お手前が始まるが、「かのす、まずおくれず、趙洲三喫の禅味有、より合引わけ、利休一道の風骨みゆ」という。座を換えて酒宴に入ると、三味線の演奏があり、設えとして小堀遠州（1579-1647）の竹筒に夏菊が生けられ、床の間には、狩野養朴常信（1636-1713）の和歌三神の軸がかかり、堂上貴族近衛家の筆による讀が

6) 渡名喜明「琉球の茶と陶」（『那覇市立壺屋焼物博物館企画展 人間国宝の茶陶』那覇市立壺屋焼物博物館編刊、2000年）、29-31頁。

加えられていたという。⁷⁾

琉球士族にとって茶の湯文化の教養が試されるのは、まさにこのような場面であったと考えてよいだろう。ただし、高津氏によれば「江戸時代薩摩における茶道についての記録は少ない」⁸⁾とのことであり、残念ながら薩摩側の文献史料に多くは期待できないようである。

琉球人同志での茶の湯について、特に16世紀末から17世紀にかけて茶の湯文化が日本から琉球に移入される過程については、喜舎場一隆氏の詳細な専論があるため、本稿では深くは立ち入らないが、例えば琉球士族の家譜を見ると、国王および世子等王族に対して茶を点てて献上した記録⁹⁾などが散見される。また、国王から茶の湯に用いる茶器一式を賜ったという記録¹⁰⁾も見受けられる。家譜資料の性質上、公務や業績と無関係の内容は記載されないが、国王や薩摩藩主等からの下賜品にも茶葉・茶器が頻出することから、琉球士族にとって茶の湯文化はそれなりに身近なものであったことは想定できる。また、島津義弘からの茶の湯作法に関する質問に千利休が答える形式の「惟新様より利休江御尋之条書」は現在鹿児島県立図書館にその写本が所蔵されており、その茶道書としての価値は高く評価されているが、この写本はもともと最後の琉球国王尚泰の女婿である護得久朝惟氏の蔵書であることが知られている¹¹⁾。このような茶道書は士族の間で写本として相当に普及していたものと思われ、例えば宮良殿内文庫の中の「山林真秘・諸法式・家訓奇語」に抄写されている茶道書などは、写本の形で茶道書が八重山諸島にまで伝わっていることを示している¹²⁾。

このようにモノ・情報の面からは日本の茶の湯文化が近世期の琉球の士族社会に相当に浸透していたことがうかがえるが、では現実にはどの程度生活の中で実践されていたのかとなると、定かではない。渡名喜氏は「王族・士族の一部では「私的」に「茶の湯」をたしなむこともあったようだが、民間に普及するには至らなかったと考えてよい。」¹³⁾と述べている。日本の茶の湯文化が公務を離れてどこまで当時の琉球社会に「内面化」していたのかは重要な問題であるが、その解明にはさらなる検討が必要であり、今後の課題としたい。

7) 高津孝「琉球と茶の湯」（同著『博物学と書物の東アジア——薩摩・琉球と海域交流——』榕樹書林、2010年）、234-235頁。なおこの原史料である毛起龍『思出草』については、池宮正治「毛起龍（識名盛命）『思出草』——翻刻と注釈」『琉球大学法文学部紀要 日本東洋文化論集』8、2002年を参照のこと。

8) 高津 前掲論文、234頁。

9) 例えば向姓家譜（辺土名家）、八世朝恩（玉城親方）の康熙三十八年二月二十八日の条に、尚貞王に対して御茶を献じたという記事がある（『那覇市史 資料編第1巻7 家譜資料（三）首里系』那覇市企画部市史編集室編刊、1982年、294頁）。

10) 例えば向姓家譜（小禄家）、八世朝騎（具志頭按司）の康熙三十年三月初八日の条に、世子尚純公より数寄屋道具壺通を賜ったという記事がある（同上書、204頁）。

11) 喜舎場 前掲論文、140-141頁。

12) 琉球大学附属図書館画像データベース・宮良殿内文庫（URL：<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/library/academic/mdl/index.html>） 文書番号49。

13) 渡名喜 前掲論文、30頁。

b. 茶器の贈答と国内生産

琉球においても鹿児島以北の日本と同じく、17世紀になると朝鮮人陶工の技術が取り入れられ、湧田焼・知名焼などの窯が登場するが、それらが統合されたのが1682年に登場する壺屋焼である。壺屋焼とは、官窯的役割を持つ、近世琉球期における代表的な陶器である。壺屋では一方では王府向けに優品を生産する一方、国内需要に応じて様々な陶器が生産されてきた。一般にその産品は釉薬をかけない荒焼と、釉薬をかける上焼に大別される。現在は那覇市壺屋焼物博物館において、近世琉球期から現在に至るまでの多種多様な産品が保存・展示されている。

最近、沖縄県立博物館・美術館と那覇市壺屋焼物博物館の合同企画展「琉球陶器の来た道」が開催された。その中で「9 琉球の美意識——茶道具と中国茶芸の道具」として、茶釜・風炉・茶入・茶家・茶碗など、琉球産の様々な茶陶が展示されている。また同企画展の図録には、仲村頭・輝広志両氏による「[資料編] 琉球陶瓦工家譜」も収録されており、現在確認できる主な陶瓦工の家譜について、その解題および部分翻刻がなされている。渡名喜氏は、17世紀後半から18世紀にかけて琉球で行われた茶陶生産について、以下のように述べている。

文献や歴代の陶工家譜に見るかぎり、「茶陶」制作に関する記事の初出は平田典通（1641～1722）のそれである。宿姓家譜によれば、彼は1667年、王府の命を受けて「御茶壺」「御茶碗」を制作・進上した。この年は、羽地朝秀が士族に茶道・立花他の稽古を督励した年でもある。……

平田典通の次代を担った陶工は、仲村渠致元（1697～1754）と仲宗根喜元（1700～1764）である。……残念なことに、茶陶の類でこれらの陶工の作品は何一つ残っていない。¹⁴⁾

これらを見ると、近世期の琉球においては、かなりの数の茶陶が生産されていたことが窺える¹⁵⁾。

また、図録『特別展 知られざる琉球使節～国際都市・鞆の浦』に掲載されている清見寺蔵「宜野湾王子奉納 天目台（朱漆巴紋牡丹七宝沈金沈金天目台及蓋） 天目茶碗」にも以下のような説明が附されており、琉球での茶陶生産の広がりを見ることができる。

具志頭王子の子孫である宜野湾王子が江戸上りの帰路に清水寺（ママ）へ墓参し奉納した天目台（茶碗付）1対。

天目台は同じく奉納された盤と同様の巴紋や牡丹などを沈金技法で表している。

天目茶碗については産地が定かではなかったが、今回、那覇市立壺屋焼物館の主任学芸員の内間靖

14) 渡名喜 前掲論文、30頁。

15) 『琉球陶器の来た道』那覇市立壺屋焼物博物館、2011年。なお、大槻・岡本・宮嶋 2009、303頁には壺屋焼物博物館の倉成多郎氏の教示として、「少なくとも近世琉球期の壺屋において、茶道具としての壺屋焼はほとんど生産されていなかったという。」「少なくとも近世日本の茶の湯の点前に使用するべく生産された壺屋焼は知られていないそうである。」と述べているが、この企画展の内容を見る限り、これらの認識は修正されるべきであろう。今回の企画展の準備段階で、従来の琉球陶器に対する理解はかなりの修正を迫られたようであるので、その影響も考慮すべきかも知れない。

氏のご教示を頂いた。これと同様な琉球産の天目茶碗が数点、沖縄に現存し琉球産と考えられるとのことである。漆器や天目茶碗まで琉球産を用い、清見寺へのお礼と先祖の供養としたのであろう。¹⁶⁾

その他、『伊江親方日々記』中にも琉球産を含めた茶器の贈答について相当数の記述が見いだせる。最も多く見られるのは茶碗であり、「蓋茶わん」「煎茶々わん」として日記中に登場する。また「茶家」（急須）や茶壺などのやりとりも間々見受けられるが、茶壺については茶葉の贈答に附随するものか否か、判断の付かないものがある。これら茶器の贈答の記述には多くの場合「和茶家」「唐煎茶々わん」「琉焼茶々わん一束〈割注：白焼〉」など産地の情報が入っており、茶器の生産地に対する関心がうかがえると共に、日本・中国・琉球の茶器が混在・併存している状況がわかる。ただし、『伊江親方日々記』に出てくる贈答茶器の多くは茶家（急須）と茶碗であり、煎茶の飲用に用いることを前提としたやり取りであろうと推定される。茶の湯文化に関連する茶道具については管見の限りでは確認できなかったことから、琉球士族の日常において茶の湯文化の持つ影響力はあまり大きくはなかったとも考えられるが、本史料のみを根拠に即断するのは避けるべきだろう。近世琉球の士族社会における茶の湯文化と煎茶文化の棲み分けをどう考えるべきか、この点に関してはさらなる調査が必要であろう。

3. 近世琉球における煎茶飲用の展開

近世琉球期においては、中国・日本から大量の茶葉が輸入されると共に、琉球国内でも茶樹栽培・製茶の動きが見られる。これらについては、基本的にはほぼすべてが琉球国内にて消費されたと考えられ、この時期の飲茶の習慣が近代以降の琉球＝沖縄の茶文化の基層をなしたとみなすことができる。しかしながら、当時の飲茶についての習慣や実態について物語る資料は決して多いとは言えない。本節では、管見の限りにおいて先行研究・史料を整理し、近世琉球における煎茶飲用の展開をたどることとしたい。

a. 茶の交易と域内生産

近世琉球期における茶葉の交易に関する先行研究は決して多いとは言えないが、現時点では真栄平房昭氏の研究が最も完備したものであると言える¹⁷⁾。真栄平氏は近世琉球期の琉球において日用品の交易が徐々に拡大していく傾向に着目し、茶葉についても文献資料にもとづいた実証的な研究を行っている。本稿においては、原則として真栄平氏の研究に依拠しつつ、近世琉球期の茶葉の交易・生産についての現時点での認識を簡潔にまとめておきたい。

16) 福山市鞆の浦歴史民俗資料館（編）『特別展 知られざる琉球使節～国際都市・鞆の浦』（福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会、2006年）、90頁。

17) 真栄平房昭「中国茶と日本茶」（『琉球を中心とした東アジアにおける物流構造』2005（平成17）年度～2007（平成19）年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書）、2008年。

〈福州からの中国茶の流入〉

福州から琉球に輸入された茶葉について、『清代中琉関係档案選編』は「中茶葉」と「細茶葉」の二種についてその統計値を示している。真栄平氏によると、「中茶葉」は1767～1778年に計5回の輸入例が見られ、最も数量の多い例で21,744斤（1767年・約13t）、その数量の平均は約16,000斤（約9,600kg）である。一方、それよりは高品質とされる「細茶葉」については1776～1874年の間に多数の輸入例が見られ、最も数量の多い例で72,000斤（1837年・約43.2t）であった。数量に振幅があるものの、概ね10tないし数十tの規模で福州—琉球間の茶葉貿易が行われていたことがうかがえる。なお、18世紀後半の「中茶葉」から19世紀の「細茶葉」への輸入の変化には、琉球国内における「中茶葉」の生産が背景として存在する可能性を真栄平氏は指摘する。ただし、ここで用いられる「中茶葉」「細茶葉」の「中」「細」とは、茶葉の品質を示す表現であり、必ずしも特定の銘柄が念頭に置かれているわけではない。後述のように福州以外にも日本から大量の茶葉が輸入され、また国内でも茶樹栽培・茶葉生産が奨励されたことを考えれば、この高品質とされる「細茶葉」についても一部上層士族向けの高級品というよりは、ひろく琉球社会で消費された可能性を考慮すべきだろう。

なお、『大島筆記』には1762年に土佐に漂着した琉球人からの聞き書きとして、福建を中心とした中国の茶文化に関する記述が少なからず見られ、中国茶を飲む習慣の浸透を窺わせる。

〈鹿児島方面からの日本茶の流入〉

日本から茶の湯文化が流入したとすれば、モノとしての日本茶の流入もまた必然である。日本茶そのものが琉球に渡った最初期の事例として、真栄平氏は17世紀初頭に島津氏の老中から中城王子朝昌へ「宇治茶一壺」が贈られたという記録を挙げている¹⁸⁾。首里の上級士族の間では、日本茶が贈答品としてやり取りされていた。また、薩摩の阿久根で海運業を営んだ河南家の文書に、薩摩から琉球に下る昆布、茶の輸送運賃に関する1849年（嘉永2）の上申書が残されている。茶の流通に伴って日本茶の密輸事件なども発生しており、1829年に発覚した密輸に関して、密輸された茶の代金として没収された金額は、総額7,922貫53文であったという¹⁹⁾。当時流通していた茶に対する需要を窺わせる数字といえる。

日本茶が琉球で流通する拠点となったのが、鹿児島に置かれた琉球館である。琉球館を経て琉球に入った茶は様々だが、とりわけ求麻茶については贈答品・饗応品として珍重され、流通の状況や管理・罰則規定、さらにはそれにもかかわらず抜荷が行われていたことなどがわかるという。

なお求麻茶と琉球の関係については、武井弘一氏による専論もある²⁰⁾。武井氏は琉球人が香味の強い求麻茶を殊更に好み、その入手のために薩摩側役人と交渉を繰り返していた様子を、『琉球館文書』を参照して論じている。この求麻茶は他の琉球側史料にも「熊茶」等の表現で間々見受けられることから、琉球の茶葉に対する嗜好性を考える上でも注目すべきであろう。一方で豊見山氏は近世期の琉球における茶葉の消費について、以下のように述べている。

18) 真栄平 前掲論文、註63。

19) 真栄平 前掲論文、63-64頁。

20) 武井弘一「茶と琉球人——近世九州の山村と琉球のあいだ——」（『沖縄研究ノート』19、2010年）、27-37頁。

求麻茶以外にも琉球人は色々なお茶を飲んでいました。宮崎のお茶も入っていますし、それから「一森」「朝日」「雁金」という日本茶も入っていました。また、中国産のお茶も大量に入ってきています。「清明茶」、沖縄では清明（シーミー）茶と呼んでいます。それから「蘭香」や「武夷茶」（武夷茶とも）——これは烏龍茶ですが、特に「武夷茶」は大量に琉球に入って消費されていました。これ以外にも中国茶が琉球へ輸入されていますが、興味深い点はこれらの中国茶は、私が現在見る限りでは、一切日本へ輸出されてはいません。つまり全部琉球社会で消費されているということです。²¹⁾

〈国内での茶葉生産の奨励について〉

『琉球国由来記』によると、琉球における茶の生産は、1623年（天啓3）に金武王子朝貞が「茶種」を薩摩から持ち帰り、金武間切漢那村（現在の宜野座村漢那区）の領内で植えさせたことを先駆とする。上江洲敏夫氏によると、当初の製茶法は薩摩から導入されたものであったが、技術的に稚拙なところがあったため、のちに中国から新しい製茶法が導入され定着したものであるという。『球陽』には1731年（雍正9）のこととして、知名筑登之親雲上朝宣（向秀美）が福州に渡って製茶技術を学び、帰国後清明茶・武夷茶・松羅茶などを試験栽培したこと、出来映えがよかったため西原間切棚原村（現在の西原町字棚原）にて「和漢の茶葉」を製造して「国用」に供したとする記事があり、琉球における茶葉国産化の様子を記している。また久米島の上江洲家文書にある『唐茶製法伝受書』という資料は、唐茶の製法伝授についての詳細を記すものである。なお、久米島での茶の栽培自体は、ここに見られる知名筑登之親雲上からの製法伝授以前より行われていたことが、同じく上江洲家文書の「家記」から知られる。一方、久米島での製茶には宮崎安貞の『農業全書』など、日本の農書も参考にされており、「久米島では日本茶と唐茶双方の栽培に成功したことがわかる」という²²⁾。このような製茶技術は、八重山などにも導入された。喜舎場家の文書中にある1854年（咸豊4）の「紙漉方并茶園方例帳」には、清明茶・武夷茶・白毫武夷茶・松羅茶・もみ茶・上茶・中茶・大葉茶・中飛茶・吉松茶・盤若寺茶・秋月茶などの和漢の茶の銘柄が登場しており、日本茶と唐茶双方の文化が共存している状況を窺うことができる²³⁾。

b. 近世期の琉球における茶葉消費の実態

では、近世期の琉球における茶葉消費の実態はいかなるものであったのだろうか。この点に関しては、なお不明な点が多く、また消費の実態を直接示す史料自体決して多くはないが、本稿では以下の史料に見られる茶葉関連の記述を通じて、考察を加えることとしたい。

21) 豊見山和行「島津氏支配下の琉球史像の転回——国家・社会・民衆——」（『沖縄研究ノート』19、2010年）、45-46頁。

22) 真栄平 前掲論文、52頁。上江洲均「久米島の茶の話」「久米島上江洲親雲上の「家記」」（いずれも『久米島の民俗文化——沖縄民俗誌Ⅱ——』榕樹書林、2007年所収）。

23) 上江洲敏夫「紙漉方并茶園方例帳」（『史料編集室紀要』第16号、1991年）、17-32頁。

『宮良殿内・石垣殿内の膳符日記』に見る近世琉球の茶文化)

『宮良殿内・石垣殿内の膳符日記』²⁴⁾は、近世琉球末期から近代琉球期にかけて、石垣島の士族が書き残した祭祀料理・宴会料理の記録である。宮良殿内の膳符が祭祀の際の料理に限定されたものであるのに対し、石垣殿内の膳符は祭祀料理及び一族（門中）の儀礼等に附随する各種の宴会料理も含んでいて、いずれもその中で供された茶の種別についても多くの場合記載されている。これらはあくまでも特別な場における料理細目を示すものであり、日常の消費実態を示すものではないが、それでも当時の琉球社会でどのような茶葉が用いられていたかを窺い知るには有用な史料である。

以下に、『宮良殿内・石垣殿内の膳符日記』中に見られる茶葉の名称の出現回数を表として示す²⁵⁾。

| 茶葉の名称 | 種別 | 宮良殿内 | 石垣殿内 (1901年以前/以後) | 小計 (1901年以前) |
|-------|-------|------|----------------------|-----------------|
| 半山 | 中国茶 | 68 | 34 (31/3) | 102 (99) |
| 清明 | 中国茶 | 20 | 40 (2/38) | 60 (22) |
| 鳳山 | 中国茶 | 2 | 0 | 2 (2) |
| 北源 | 中国茶 | 4 | 0 | 4 (4) |
| 白煎 | 日本茶 | 45 | 12 (10/2) | 57 (55) |
| 都之城* | 日本茶 | 16 | 4 (4/0) | 20 (20) |
| 雲白煎* | 日本茶 | 11 | 7 (7/0) | 18 (18) |
| 白井* | 日本茶 | 0 | 13 (4/9) | 13 (4) |
| 鶴之森* | 日本茶 | 1 | 8 (5/3) | 9 (6) |
| 紅梅 | 日本茶 | 1 | 2 (2/0) | 3 (3) |
| 花橘 | 日本茶 | 2 | 1 (1/0) | 3 (3) |
| 萬春 | 日本茶 | 3 | 0 | 3 (3) |
| 吉杜 | 日本茶 | 0 | 1 (1/0) | 1 (1) |
| 涌の梅 | 日本茶 | 1 | 0 | 1 (1) |
| 初翠* | (日本?) | 0 | 3 (3/0) | 3 (3) |
| 大福 | (日本?) | 0 | 2 (2/0) | 2 (2) |
| 芳煎 | (日本?) | 0 | 1 (1/0) | 1 (1) |
| 花の香 | (日本?) | 0 | 1 (1/0) | 1 (1) |
| 「上茶」 | ? | 12 | 0 | 12 (12) |
| 「細上茶」 | ? | 2 | 2 (2/0) | 4 (12) |

ここから読み取れる近世末期の琉球社会で主に飲用されていた茶葉としては、中国茶では半山茶・清

24) 金城須美子『宮良殿内・石垣殿内の膳符日記——近世沖縄の料理研究史料』九州大学出版会、1995年。

25) ただし、宮良殿内と石垣殿内の膳符日記とでは、対象となる期間に大きなずれがある。

宮良殿内の膳符日記：1862（同治元）年～1901（明治34）年

石垣殿内の膳符日記：1866（同治5）年～1970（昭和45）年

石垣殿内の膳符日記は現代に属する時期のデータを含むため、近世末期から近代初期の状況を把握するために、便宜上宮良殿内の膳符日記の下限である1901年以前と以後で区切り、それぞれの数値を示している。なお1901年はいわゆる「旧慣温存」期が終了する年と見なされており、その意味でもこの年で区切ることは本稿の意図と符合する。なお、表中の茶葉の名称欄に*がついているものは、史料中に複数の表記が見られることを示す。

明茶、日本茶では白煎茶・都之城茶・雲白煎茶ということになる。日本茶・中国茶ともに常用していたことがわかる。史料中に茶葉の銘柄が明記されていない場合も少なくないため即断できないものの、全体としては中国茶の方がやや多い。また、特に石垣殿内のデータについては、比較の便宜上1901年を境としてその前後の数値も出しているが、1901年以前は中国茶であれば半山茶が中心、清明茶の事例はわずか2例で日本茶も様々な銘柄が用いられているのに対し、以後の時期では清明茶が中心に用いられ、日本茶の銘柄は記録に残らなくなっていく。銘柄が記載されないケースの多さを考慮すれば単純に中国茶が多用されたと判断するわけにはいかないが、茶葉に対する記録者の認識の変化をある程度反映している可能性もある。また、同一の儀礼の中でも複数の茶葉が用いられていることから、その使い分けの傾向やそれぞれの銘柄に対する認識を読み取ることが可能かも知れない。

b. 『伊江親方日々記』に登場する茶器・茶葉の贈答

近世琉球期の資料は量的には非常に多いものの、個人的な日記は現存資料の中では数えるほどしか残されていない。その中でも比較的著名なものが『伊江親方日々記』であり、その影印及び翻刻が『沖縄県史 資料編7 伊江親方日々記』として刊行されている。『伊江親方日々記』の中には、主に贈答品として、茶器・茶葉のやり取りが頻繁になされていたことが記されている。ここでは特に茶葉の贈答についてその概要を確認し、近世琉球の士族社会における茶文化のありようを確認してみたい。

まず茶葉の贈答については、半山茶・一之森茶・北源茶・鶴之森茶・熊上茶（求麻茶）・清明茶・水蒸茶・白木森茶・阿部茶・丹桂茶・柳之森茶など多種の茶葉の名称が記録されており、様々な茶がやりとりされていた。このうち半山茶・北源茶・清明茶（および恐らくは丹桂茶）は中国茶であるが、例えば「御茶一包〈割注：怡山院清明〉」「怡山院清明小壺一ツ」などと、茶葉の産地と思われる地名も併記されている場合もある。それ以外の茶葉は恐らく日本茶であろうが、例えば「此節始而下り候柳之森与申茶上候処殊之外御賞味被成、……」などと新しく琉球に持ち込まれたと思われる柳之森茶の飲用についての記述などは、当時の琉球士族の茶葉に対する興味関心の高さを反映したものであろう。その他に単に「煎茶」とのみ記録されている例も少なくなく、煎茶飲用の普及ぶりがうかがえる。また、「唐和茶二包」などという形で中国茶と日本茶がセットでやりとりされていたことも記されており、日本と中国の茶文化がそれぞれ別個に受容されているというよりは、むしろ併存している状況が察せられる。個別の銘柄に対する評価や嗜好性などはなお不明であるが、この辺りに中国と日本双方の茶文化の交差点としての琉球茶文化のありようを読み取ることができよう。

c. その他の茶葉消費に関連する史料

真栄平氏によれば、慶良間島における茶の消費について、1855年の「仲尾次政隆翁日記」を見ると、茶に関する24回の記述のうち、清明茶15回、上茶6回、半山茶2回、紅梅茶1回と、清明茶が多く飲まれていた様子が見える。これらの状況から那覇・首里等の状況を類推することも可能であろう。また、入手した唐茶が、琉球から薩摩への贈答品として用いられることもあったという²⁶⁾。

26) 真栄平 前掲論文、58頁。

比嘉家文書の「諸野菜并諸雑名集」²⁷⁾には、様々な日用品の語彙が列記されているが、その中に茶に関連する語彙が相当数含まれている。茶葉の銘柄と思われるものとしては、「蓮心技茶」「蘭上茶」「朮馬上茶」「■(極カ)揃茶」「昔極茶」「大茶貳拾斤」「中茶貳拾六斤」「清明茶拾斤」「火炉茶七斤」「盤若寺茶拾斤」「朝日茶壺斤」「北源茶八斤」「宇治茶五斤」「半山六斤」「壺ノ盛茶貳斤」「碧炉茶」「蘭香茶」「独天茶」「鶴之盛茶」などが列挙されており、様々な茶葉の銘柄が混在して琉球士族の生活の中に入り込んでいる様子を窺わせる。

5. 小結

以上、琉球王国期の茶文化の受容について、その概要を先行研究と専門家からの教示を中心に述べた。一昨年にまとめた第一回現地調査の報告書と比べると、近世期琉球の茶文化に対するイメージはそれほど大きく変わってはいない。近世以前において、琉球で確認できる茶文化は概ね日本から伝来してきたと思われる茶の湯文化であったと思われる。それが近世期に入ると中国茶の文化の影響が強くなり、恐らくは庶民階層までを含む、煎茶飲用を基調とした茶文化が形成されたのであろう。中国茶の文化の受容時期は定かではないが、『唐茶製法伝受書』などの状況証拠からみて、恐らく17世紀中葉から後半までには受容されていたと考えるのが穏当であろう。この近世段階で形成された琉球独特の茶文化が、近代以降の琉球＝沖縄の茶文化の独自性を留意したと考えられるのだが、近世期の琉球茶文化の特性については、なお不明瞭な点が残されており、さらなる検討が必要である。ただ、近年の琉球史・琉球考古学研究の高まりによって、史料の質・量両面を含めて琉球茶文化の研究についてはその可能性はさらに高まっていることは間違いない。今回確認した内容からも、近世期の琉球が中国・日本双方の茶文化を吸収しつつ、自国産の茶器・茶葉を加えてそれらを混在させたままに、独自の飲茶の風俗を謳歌していたありさまを垣間見ることができた。近世期を通じて茶を主要交易品の一つとして輸入し、また自らも生産し、琉球の生活文化の中で不可欠なものとして位置づけていく中で、琉球は中国・日本双方の周縁であるという特性を十分に活かすことができたと言える。このような琉球の重層的な茶文化の生成は近代以降の琉球の生活文化の方向性に少なからず作用し、琉球文化の自己イメージを形作る確かな一助となったのである。

27) 『那覇市史 資料編第1巻12 近世史料補遺・雑纂』(那覇市市民文化部市史編集室、2004年)、441-453頁。